寛永諸家譜

清和源氏辛七冊之内
義光流之内 小笠原

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (48)
函號 秘 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

三好　林
上田　伴野
中鴻　寺盛
九鬼　沼新

寛永諸家系圖傳

清和源氏　　第四

義光流

三好

浅草文庫

系

小笠原刑部　生駒備前

行波　細川摂津守

系

小笠原式部　後ハ三好筑前守ト
号ス　生母因幡　三好の妹頃
三好修理大夫ガ父ナリ
又刑部ト称ス　阿波ノ住ニ細川
備後守ト共ニ光秀ハ人倫ノ比類
為体ナク数度忠節ヲ
ヲ出シ三好ノ別ニ恩賞

ニシテ領地ヲウケ光秀ハ光秀ヲ
三好ト称ス　法名喜運
今摂津ニ小笠原ノ別ト云フ
年ハ八十八家侍ハ皆悲歎
ス

系

孫太郎

系

孫次郎

家

喜兵衛　生駒信州
拾例　江口かもかく討死仕り　四十二家
法名　宗三

家

下野守　法名　鈞閑

一位

因幡守　生駒拾例
光下野守　なしくるとなる山へ
下野守　弟　脇腹
一位十六家の内　相模より　飯野の城を
かこむ　はと　江一位と　部屋湯川　と　戦
とくみうちして　弟　と　切り　仕り
後理左衛門　子　藤兵衛　後文　さげ　いまた
光　を　指　と　うち　後理左衛門　死して
子　左衛門　と　信長　合戦　三好氏

おかるゝ討死す一組の士くい波しかく迅雷しうしまを信長たつゝかしよい
もたまふ以へ一組をれより作長
はるふ
元龍元年九月廿日信長より播州
を落飛しおかゝ枝持万とたまふ
ゝ此茶市今しを見はる
秀吉蔵主の後
康熙大将軍しはゝ人より関東御教四

此ときゝ一位書ゝとばゝ方しを乗
作長す
長七年関原出陣し作長
大坂安度に陣し一組作長
大将軍此伯し一位しはゝ河内の案内を考
屋しゝ常し 御家し作して
ゝのゝを申す
長七九年
大将軍の命しより従五位下し叙し

関白殿ヘ仰せ
大権現薨御の後
名徳院殿へ仕へ人数の常と　御前ら
く候ハて御ゝと申さる
寛永八年十二月十日病死　法名
為三

可正

越後守　生母月蓮

大権現へ仕へ人数の采地を領せ
納命へよりく御給仕者となる
妻也ゆゑ関ケ原出陣へ供せ
同八年
大権現北納命ゆゑ従五位下に
叙す
大坂安度の御陣へ供せ
寛永十一年七月五日病死

勝任

俗名当　生母孫氏

祖父一任が養子となりて家督を

継ぐ　従五位

右法院殿と称し奉る　養父一任

去年大炊頭利勝となり　従五位下に叙せん事を願ふ

利勝

右法院殿と言上し給へば　仰せいなく

一任すること年老らるるに成

候間　御許容なし

と云々　寛永七年十二月廿八日　勝

任従五位下に叙す

勝正

猪之助　生母武蔵

先勝任　祖父一任が遠江に下向の

勝正庶子なりといへども家督となる

家役　釘貫（くぎぬき）

国立公文書館
National Archives of Japan

三好

長直

伊賀守　生国阿波

七郎

備中守　生国同前　法名真信

房一

丹後守　法五位下　生国同家

三好山城守に属すれども信長に従ひ

入野鹿草城番と紙俵の記数度

軍忠をぬきんづる後秀吉に仕へ

使番となり黄纐を朝鮮陣に

御ふる武勇はかまを出るはと

秀頼大坂城きらひ　ゆえに有馬中務

大輔として房一を召おかれ久しく

寛永五年関ヶ原御陣に供奉し

数切りこの外

大坂城の御しるし来地をたまふ屋敷

領地をのうもんきれ命により房一

河内の国と共ぶ河州ふ

おのく二万三百石に来地を給ふ

御相伴衆となる

後列しおのく病死世に六十一家

法石道市

長連

備中守　法五位下　生國摂州

法石道説

長直　十四家の内

大指揮を蒙り、京御陣に伺候

文長五年関ヶ原御陣に伺候

于石の城地を給わり御信ら石

ばかりの房一死して後遺跡二子三百

石を給わり　名命によりて長連が領

地千石を直重小たまふ

同十九年大坂御陣に伺候

之後

名誉院殿に仕え人数

直重

左衛門　生母姫路城主　法石常清

石清水院殿

将軍家に仕へ人なり

父長直死し後四領を給ひ直重

が跡千石を才直次に給ふ

直次

加九郎　生涯武芸

石清水院殿

将軍家に仕へ人なり

直滋

庵之助　生涯武芸

将軍家に仕へ人なり直次遺跡千石を

たまふ

家紋　三角字松皮釘貫

国立公文書館
National Archives of Japan

林

うのさ紀か小笠原なり先祖位列
林北郷と居住し林と称号す
むし親氏之列　新田より三列
乃松平へ御のかりの附章位列林
郷と居住し分て林の系ゞ鍛
し御産をうれ市城平のさ紀
正月元日し林の系光北御吸物と

[illegible]すたりこのうへ今より敬中
しかるべきこと右例をおこなひ親氏
自殺仕るべく林の系三列松平
へ移し石清水の通後に諸侍乃頭
を仕けらるべきの旨切に申
東照大権現の御代かも又林乃子孫
毎年元日ハ 御家へ召おされ御
盃を一番に下さる忠重が祖父右
忠代もまたかくのごとし

系

菊姫　生母三列
清康君　廣忠卿に成る人なり
天文六年　廣忠卿を于松巷と申す
ふたりとも菊姫五人の者忠切にして
俗に御祝父下さる
七度入母屋紋忠節　安法新不御
田地方十五貫文宛下さる加増
於末代二万石遠州の半

天文六年

十月廿二日　千松丸　御立判

八田長六郎

大窪新八郎

成沢又左衛門

大原左近右衛門

林弥四郎

系

弥五郎　生母同家

廣志郎

大炊助と号す

二十五歳にして死す

忠政

弥五郎　道永　生母同家

大炊助と号す　忠政十七歳

より服病にて人事を不知人事を不知

元和八年四月十四日五十九歳にて
病死

長忠

故四郎　生母同家
長池院殿（作人なり）
元和元年大坂陣の時供をつかまつり
高木主水組にて八月十四日九家に
て討死　法名久露

重信

五郎兵衛　生母相撲
賀八郎次郎五郎兵衛重信の子なり林
道歌が養子となり後に林と
称号す
将軍家へ御目見
寛永十六年病死年三十四

重治

五郎左衛門　生母同家

實ハ故陸奥重治ガ子なり　叔父

重信ガ養子となる

忠勝

兵庫助　生母武蔵

将軍家へ御奉公

寛永十五年二月十五日二條の御城

御番ゟ帰宅　病死　法名宗春

忠重

兵庫助　生母同家

寛永十五年十二月廿七歳にて

将軍家へ初御目見

家級九の内ゟ右三巴ゟ下に一文字

国立公文書館
National Archives of Japan

林

清雲

十芸藩　生必三列
先祖代々　沖尚家より清人有

清勝

小右　生必男家

東照大権現より拝領の人参の根 祭り
て位牌を小堂に

清賓

清賓 生母同家
大権現を奉渇し奉る
関原陣 小牧
長久手 小山陣
元和二年
名徳院殿より清人参を賜る

寛永六年二月 鈞命によりて二條城
御鉄炮をうづる

家紋 右巴 一文字

国立公文書館
National Archives of Japan

上田

新羅三郎義光末葉にして
小笠原の一族なり信州上田
住す是ハ孫號とす

重氏

孫太郎　生駒尾列
丹波五郎左衛門　長秀と称ス

重元

[illegible]
丹羽氏秀[illegible]

重安

[illegible]
利髮して京師と号す
丹羽氏秀[illegible]

天正十三年氏秀死して後世信秀
[illegible]秀[illegible]陪臣数人をもつて[illegible]の附
重安[illegible]と身し[illegible]歳おれうふく
[illegible]方石[illegible]地を願ひ
文禄三年七月廿九日世信の姓をた
まわり従五位下小叙して氷勝と称
変化五年淺野幸長つつく紀
州に位す
元和元年大坂乱乃附叙[illegible]泉

刑罰井しおかくいとみたるく軍
切ハ、また藝刑し振任す

重秀

定勅

寛永九年三月

将軍家をあしたまう

同十二年二月六日江刑野例新小お
かくくゑんの他を領し

重改

紬お
濃野毛織同定織し作ふ

家紋釘貫

国立公文書館
National Archives of Japan

上田

元次

万五郎　生必三列

清康君廣忠御帰城

永禄十年十二月十九日岩殿山合戦

病死七十五家

清右衛門

元俊

芸庫　生国同家

廣志郷

東照大権現

石池院殿さまたふ

初め清康君才　松平義人信孝

廣志郷しうむきうく織田彈正忠と

ちかして三河芝崎の時元俊

ちかうら信孝を討とる芝ふより三河大

濱くかめく領地を給ふる元俊

大権現信孝ゆしむしるを元俊小方と嫁せしめ

たまふ元俊小方なる人別し三河の須

見村ふく信孝ゆしむしるの領地とたまふ

時し元俊うの命のうしけなきうを

謝して、いく信孝ゆ背そし沖一族た

ちをうにうのむしるをわとうるゆい者

をいうれゆ申ゆうれも

大隅殿の伯父にて元俊い数代御家人
佐々木石川安藝守弟孫なる人御
まおわく御出家をとげたまふ
なりとく出家して信のうち人辞
世にとゝまりて法名をしるす
めとる
元俊信孝と討死をとゝまる
かゝり引分うたいしに先きまり
三州しまおわく御城の留守番と勤め

番頭をつとる
関東御入国の後御城
御留守番頭となりて老をし
おゝふ人御奉公をとゝまる
頭の地に住ゝ
寛七十二年七月十二日武州羽林村
しおわく病死八十一家法名法心

元俊

万五郎

寿七十三年 城州伏見にて死す

二十九家

後勝

清右衛門　生母三列

寛永元年四月十八日 駿府にて

死す 三十九歳　法名 澤圓

勝正

勘三郎　生母武蔵

元勝

万五郎

左近院殿

将軍家へ仕る人なり

家従 園内 吾根藤

左近院殿

将軍家へ仕る人なり

国立公文書館
National Archives of Japan

律の部

●奥元

刑部大輔

奥平

相模守

奥信

美濃守

奥行

京門作

奥吉

能光寺　明清寺と号す

信玄御教文ヨリ出る

奥右

英馬寺　全正寺と号す

信玄御教ヨリ出る

東照大権現ヨリ出る

寛永文年奥列御陣の時奥右代

東寺ヨリ江戸方御動ヨリ

右法院殿御家奥右ヨリ

勾命ヨリ信列三田坂の御番を

勤む

奥明

[illegible]

慶長十九年元和元年大坂陣小出

多作渡当正信ガ組ニ属シテ

長池院殿の供奉ス

奥改

九月廿日

寛永十三年

[illegible]軍家ニ供奉ス

家役　松皮菱

国立公文書館
National Archives of Japan

中嶋

其ハ信州伴野六郎時長が末流
後ハ中條と称号す

盛信

筑後守　生母武州
小條氏也同陸奥守氏綱ノ娘
年七十五ヵ病死　法名常覚

盛直

大膳　生國同所

小幡陸奥守氏繩小幡人甲州新府陣
ゝく言石ゆうれうさ紀小田原と
甲州と仁を行ゐたくたゝ知ゆう
ゝ紀諸文を以ゝ信玄ゆ硯を
うぐいゝうゝ陸奥ゝ小見せられた
大ゝゝうびすれゝ農英ゝてゝ

西ゝ北十文字の紋乃指物をさゞく
天正十八年小田原城の後墨年
棄逃大控坂へ御おられすゝ奥州
御陣の後
変ゝ五ゝ関原御陣ゝ後
同十八年病死六十歳　法名常林

信久

五郎兵衛　生國同所

白河院殿へ仕へ奉り
寛永九年六十二歳にて病死

正平

三右衛門　生母同家
文和八年
白河院殿へ参り奉る
寛永元年
将軍家へ仕へ奉る

正勝

掃部　生母同家
寛永十三年
将軍家へ参り奉る
寛八甲州中将頼宣の嫡子
正定に武田信頼と仕へ甲州後去の
ち
大隅殿へ仕へ奉る

寿永五年、

石清水院職を奉じ、幸田御陣の

供奉す。

大坂表度々御陣に供奉、軍功とつ

もる。

寛永八年七十三歳にして病死

盛昌

十六歳にて　生母同家

大膳亮

石清水院職に任ぜられ、忠を御

しかるに、

将軍家へ御奉公を勤む

又十七歳にして病死　法名元燈

盛利

五郎右衛門　生母同家

寛永九年十一歳にして

大御所と法皇と元まる

同十五年

右法院殿と申奉し

元和元年大坂乗乱の時に新侍中当

組に属し城中二の丸に勢く首二

つらとり軍功をとげ申すこと後

将軍家と申し申奉

登明

生母同家

寛永十三年

将軍家と申奉し申す

登直

孫兵衛

寛永十二年

将軍家へ右おさえ沖番を勤む

豪級九巴團扇

国立公文書館
National Archives of Japan

斧鉞

小笠原氏ハ源流ハ先祖信濃守大井
ヨリ分ル後ハ出羽國酒利郡
斧鉞郷ヲ移リテ代々住ス故
斧鉞ト称号ス

先重

富士物　生駒羽州

天正十九年五月写肥前名護屋ニ
おいて三十一歳ニ而死す　法名存巌

光隆

右道　生母同家
文長五年関ヶ原御陣の時
東照大権様へ光隆なりびに一族若干
おさき京橋おゝへの方出奔致庄内
にまいりとゝ様と紀州へ帰参して

常州行方郡のうち新宮村と申候ゝ
ものゝ
名法院殿へ仕人数
同十四年五月十四歳列ニ出おく
二十九歳ニ而死す　法名信誉

光種

次右衛門　生母同家
寛永六年十二月廿七日初ニ

右法院殿と称し奉り御書院番と仕

候

家役　松笹菱

丸義

小笠原の末流なり

●毛無

芸庫郎　生駒英清

織田信長

利勝

五郎兵衛　生駒三州

三列器滝しおかく
東照大権現とあしなる
天正十八年関東江入国の時供奉して
御幕とゝのゝく老後しかじくこと後を
授ゝ所
文禄六年相列ゝ病死時ゝ七十歳
法名現雪

利久

四通　生国同名
豪列演相ゝおかく
大権現とあゝ生ゝ
長浜院殿ゝ仕ゝ人ゝ大坂番の組頭とゝ
元和七年池田三左衛門政ゝ仕ゝ
俸禄千石古志之人嫁娶のゝ
長浜院殿の位とゝ
て技地ゝ居ゝ
寛永九年病死　六十二歳

重成

年号 生没同家

家例 須賀と称す

大隅殿と称す

寛永五年相州病死 五十五歳

法名 長清

重親

三郎左衛門 生没相州

寛永五年九月 右徳院殿と称し奉り 十六家

同九年五月 将軍家と称し奉り 大御番を勤む

利明

五郎兵衛尉 生没武蔵

寛永八年十一月 右徳院殿と称し奉り

同九年

将軍家より御人数大御番を勤む

同十六年　給命より御膳番の役を

つとむ

家役　格式

沼田

小笠原氏より出ず

行忠

越中　生田信州

武田信玄に属す　九十二歳にて死去法名道和

勝忠

越中　生田四郎

仁安元年

天正九年三月廿六日六十三歳にて死

法名存龍

昌忠

九郎左衛門　生国甲斐

東照大権現と有り

寛永十一年十月十六日死寿年六十三

法名　士龍

章次

九郎左衛門　生国同家

大権現

台徳院殿へ仕る

寛永十九年大坂御陣の時仕

牧野忠成組に属す翌年死

しかハ松平越中守組に属し

佐渡守

昌亜（まさつぐ）

平安定　生田武義（むさし）

右軍家へ御入申候

家従（いへのじう）　松皮菱（まつかはびし）

沼部

うちに横田と号す重政代りを

つとく沼部と改め称す

重政

横田下野　生田勝利

武田信虎

重政

九郎三郎　右衛門　生出甲斐
信玄傍輩　文弓　矢の子
とゆうさ軍中の使者
天正三年長篠にて討死

正次

義右衛門　生出甲斐

天正十年甲州御入国の時
東照大権現に奉仕
寛永元年関ヶ原陣の時正次伝聞
同十七年病死　年三十九　法名休園

重貞

義兵衛　生田武蔵
元和二年
右近院殿に仕

将軍家より仕え人数

重任

三帰云清　生年月日

元和五年

右法院殿

将軍家へ仕え人数

家侍下勝　松皮菱

沼部

小笠原の末流上野介末裔別紙

沼部

末

伊賀守　生駒甲斐

武田信虎　信玄父子ハ人ゝ甲州

の内山宮村　千塚村　中村　羽黒村　湯村

荒川村　菖蒲嶽村　七沼寺村　七塚村等

を願ひ　法名攀桂

勝資

大炊助　尾張守　生母同家

信玄傍頼父子にして父伴賀守の願
地を給ふ事を和仁列に加へ数ケ
所の領地を給ふ甲州一乱の時
討死　法名天祐

家

又五郎　民部　生母同家

始め刑部少輔と書す父
信玄傍輩にして甲州一乱の後
大指沢へ出奔し三河宮子村にて
法名古器

信業

又八郎　後に和田と称す　芸州家

国立公文書館
National Archives of Japan

生國甲斐
信玄勝頼父子ニ仕ふ
母ハ野和田の嫁ニ和田芸藩左文娘
一人ハ勝頼ニ信棄ニ仕ふ家督
とゝぐこの人ハ和田芸藩左文と名乗
甲州没後乃後小藤氏ニ屬ス
元和三年九月廿九日年五十八死ス
法名日山

又七郎　大炊助　生國甲斐
信玄勝頼父子ニ仕ふ甲州没後
の後
大隅狩ハ石ヶ沢ニ住ス
藤子村　七尾村　太家村　祇園村　新
作村　迦利村の領地ニ所ス
法名一溪

業保

又八郎
幼名乃内文信業ガ死去ニ付跡刑部
勇ナルヲ以テ家ヲ継ガシム
寛永四年十月二日
将軍家ヲ奉シ始メテ
同六月　御命ニヨリ御小姓組乃
御番ヲ勤ム
同八年従地ヲ給フ

同十年御加増被仰御書院番
ヲ仕ル

家紋　松皮菱

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan